シンポジウムII

5. 聴覚障害に対する高気圧酸素治療の適応ー主として突発性難聴についてー

福田成司*1) 柳田則之*1) 高橋英世*2)
(*1)名古屋大学医学部耳鼻咽喉科 *2) 同 高気圧治療部)

一般に，感音難聴の多くのものは，如何なる治療を行っても治療に反応せず，聴力回復を期待することは困難である。しかしながら，急性感音難聴のごく初期のものについては聴力回復が期待でき，その代表的な疾患が突発性難聴である。今回，私どもは，突発性難聴に関して，特に高気圧酸素治療について言及した。

対象は，1972年より1992年までの21年間に，発症より2週間以内に名古屋大学附属病院に来院し，聴力が固定するまで観察し得た1450例（1461耳）の突発性難聴である。

私どもは，殆どすべての症例において併用療法を行っているが，その中でも，ビタミンB群，代謝賦活剤，血管拡張剤の3者はいずれも90%以上の症例に併用しており，これを基本治療として，その上にステロイド，高気圧酸素などの治療法を併用している。ステロイドを併用した症例は783耳，高気圧酸素を併用した症例は476耳である。

聴力回復の予後を左右する因子として，発症から治療までの期間，聴力低下の程度・型が特に重要であり，これらの因子をできるだけ同一の条件にして種々の治療法と比較検討することが大切である。その意味で，病日期を1～4病日，5～7病日，8～14病日，15～21病日，22～28病日に区分し，また平均聴力レベル（5周波数の平均）を40～59dB，60～79dB，80～99dB，100～115dBに区分して，高気圧酸素を併用したものと，併用しなかったものについて比較検討した。

その結果，軽度および中等度の難聴で，7病日以内の早期のものでは，基本治療で聴力回復の認められたものが多くみられる。しかし，7病日を過ぎても聴力回復のないものには，高気圧酸素治療を併用すると回復する症例が認められた。また，高度難聴の症例では，初期から高気圧酸素を併用した方が良い成績が得られた。

これらの成績をもとにして，突発性難聴に対する高気圧酸素治療の適応について述べた。